



2025年度 理事者の1年

2025年度理事者の任期も残すところ、あと1か月となりました。会長、副会長に、1年間を振り返っての感想と今の思い、そして会長には「副会長へひとこと」、副会長には「理事者室の思い出」と「任期を終えてやりたいこと」を語っていただきました。

*写真後列右端：川瀬監事、同左端：松下監事。26頁「監事室から」と併せてお読みください。

いつかは花開くことを信じて！

会長 鈴木 善和 (39期)



この1年を振り返り、会長として悔いはないのですが、多くの課題を襁に託して次年度に繋いで行くことになりました。

まず、弁護士会の責務であると唱えました職業人としての弁護士の経済的基盤の維持拡充については、特に悪くなったとの声を聞いてはいませんが、良くなったかといいますと数字の検証はこれからです。また、会内合意の質を高めることと積極的情報公開についても、どれだけ進んだか、振り返って忸怩たるものがあります。選択的夫婦別姓法案の行く末も心配事です。

また、再審法改正、これについては国会審議が年度を跨ぎますので次年度となりますが、結果を出せるまでの道筋は出来ています。谷間問題の解決、これも法務省サイドとの協議のレベルが上がってきており、令和9年度予算を目指してということになりますが、大きく前進するルール

が出来つつあります。空襲等被害者の救済措置についても世田谷区では見舞金支給条例が成立しており、国レベルでの救済法案への大きな後押しになることが期待されています。当会の会員数の増加という点でも、何が奏功したのかは不明ですが、数字上も一定の成果は出つつあるものと思います。

ただ、こうして振り返りますと、確かな結果が出せていないのになぜ悔いがないのかという気持ちの問題を明かさなければなりません。多分それは、人を大切にしよう、結果を出すために全力を尽くそうと毎日思っ過ぎてきたからではないかと、自己満足ではありますが、気持ちとしては健やかというところが正直なところですよ。

こう思い起こしてみますと、支えていただいた副会長、監事、職員の皆様、そして何よりも会員の皆様には本当に感謝しかありません。一年間、有り難うございました。

副会長へひとこと

五十嵐副会長：何でも安心してお任せしておりました。感謝の言葉しかありません。

豊崎副会長：会員の意見が様々な中、難しい分野を担当してもらいました。助かりました。

菅沼副会長：冷静に懸案の課題を解決してもらって、これで一区切りですね、お疲れ様でした。

的場副会長：他会や弁連に加えて海外の弁護士会との交流活動、大いに助かりました。

大森副会長：担当を着実に処理しながら、二次会の帝王としてのご活躍も有り難うございました。

西川副会長：財務に加え、日弁連常務理事としての当会とのパイプ役もお見事でした。ご苦労様。

1年を振り返って



副会長 五十嵐 裕美 (46期)

日々、目の前の様々な課題に取り組んでいるうちに、あっという間に1年が過ぎたというのが正直な実感です。しかも、それらの課題は、しばしば突発的に発生し、かつ、想定外の事態だったりするので、その都度、会則・会規・規則等を確認し、弁護士会としての職責が何かを軸に置きながら、自分で考え、あるいは、理事者室のメンバーに相談しながら対応することになります。なかなか頭を使いますので、そんなときには、皆様が差し入れてくださる美味しいお菓子でブドウ糖を補給するのが癒しとなりました。

また、振り返ってみると不祥事対応にかなりの時間と労力を要した1年でもありました。後ろ向きの作業ではあるものの、弁護士自治と市民の弁護士への信頼を守るために大切な仕事です。多くの会員や職員が、委員会等で職務適正化のために努力されている現場にも触れて感銘を受けました。

今年は、弁護士制度150年となりますが、そのうちの1年に何かお役に立っていると良いなと思いつつ、次の年度に引き継いでいきたいと思っています。

理事者室の思い出

とてもチームワークの良い、居心地の良い役員室でした。役員個々の能力をいかんなく発揮するには、お互いのコミュニケーションとサポートが何より大事と感じています。また、職員の方に「今年の役員室は入りやすい雰囲気」と言っていたのがうれしかったです。

任期を終えてやりたいこと

元来、夜型人間でしたが、会務では朝早めにスタートの会議もしばしばあり、少し朝型にシフトしました。4月以降も今のペースを継続して健康に過ごしていきたいです。

駅伝8区のような心境で



副会長 豊崎 寿昌 (48期)

まずはこの1年間能力的にも色々偏りのある私を支えてくださった他の理事者及び職員の方々、お世話になった担当委員会を始めとする会員の皆様にあつく御礼を申し上げます。

1年という任期、6名の分担制という副会長の役割からして、一人でできることは限られているとの認識で臨んだつもりでしたが、予想以上に前年度から引き継いだ課題に対応し、また次年度理事者に課題を引き継ぐという面が多く、駅伝で言えば箱根8区のような心境です。もっとも、この原稿を書いている現時点は1月半ばであり、未だ17キロ辺りをふうふう言いながら走っている状態でマイクを突きつけられてレースの感想を聞かれているような違和感があります(笑)。

理事者となって改めて実感したことは、東弁という組織における職員の方々及び委員会などの活動の強靱さです。他方でその活動量が歴史の重みに耐えかねているような部分もあり、それなりに大きな組織のコントロールの難しさも感じました。個々の業務について言えば、弁護士自治の

下支えとしての市民窓口案件への対応やデジタル化基本計画に基づく新システムの導入への検討・会内手続などを担当したことにより、現在及び将来の東弁についてなにかがしかの役割は果たしたと思っていますが、こればかりは後代の評価を待たざるを得ません。

理事者室の思い出

前年度と異なり夕方まで静かな理事者室であったと認識していますが、そうはいつでもお互い閑達に議論、相談のできる楽しい場所でした。他方でミーティング後の飲み会等の的場副会長の手配力には敬服しました。

任期を終えてやりたいこと

運動不足によりあちこち身体に支障を来した(膝とか肉離れとかw)のでメディカルケアとリハビリと運動とダイエット。あと仕事しないと…

1年を振り返って

副会長 菅沼 真 (50期)



とにかく密度の濃い1年でした。①全てに出席するのが困難な数の会議や各種会合、②膨大な数の稟議書、③突発的な問題への緊急対応等々、刺激的な毎日の連続でした。自分のキャパを超えていると感じたことも一度や二度ではありませんが、9時30分からの理事会の日に起きたら10時過ぎだった(!)という大失態を除けば、大過なく任期を全うできそうで、ホッと胸をなでおろしています。

これも多くの人に支えていただいたおかげです。中でも、東弁の職員の皆さんには日々お世話になり、感謝の念に堪えません。秘書課の皆さんの笑顔と気遣いは理事会を常に居心地よくしてくれましたし、局次長や私の担当の職員さんは、皆さん責任感にあふれ、至らぬ副会長を助けてくれました。自らの力不足や不甲斐なさに頭を抱えたことはありましたが、人との関係でストレスを感じる事がなかったこと、これが一番大きかったような気がしています。

…と書きましたが、この原稿を執筆しているのは1月中旬。残りの任期が2か月半ある中、難題が山積しており、

正直、1年を振り返る余裕はありませんが、3月31日に清々しい気持ちで理事者室を後にできればと願っています。

理事者室の思い出

今年の執行部は、意識してオンとオフを使い分けたので、比較的静かな理事者室だったと思います。もっとも、理事者室を出れば別で、特にマイクを握ると凄い人が。一次会の後、某副会長が某カラオケ店の赤い看板目指してそそくさと歩いていく後ろ姿は、何度見ても笑ってしまいます。

任期を終えてやりたいこと

ハードな日々を言い訳に家族をほったらかしにしていたので、穴埋めをしなければなりません。先日、妻に「GWに沖縄旅行を予約したから」と言われ、一瞬、旅行代金だけ支払うのかと不安になりましたが、私も人数に入っていたので、安心しました。

多くの支えとともにあった1年

副会長 的場 美友紀 (52期)



副会長に就任してからを振り返ると、本当に濃い時間だったと感じています。限られた1年という期間ではありましたが、日々生じる出来事について、何をどうできるのか、同じ年度に理事者を務めた仲間とともに考え、悩み、走り続けてきました。どう判断するのがよいのか迷う場面でも、率直な言葉を交わし、支え合いながら前に進めた時間は、私にとってかけがえのない経験でした。また、当会の取り組みが、多くの人に支えられて成り立っていると同時に、その1人ひとりの力によって形づくられていることを日々実感する1年でもありました。非弁提携弁護士対策本部や非弁護士取締委員会では、弁護士及び弁護士会に対する市民の信頼を維持するため、地道な対応が積み重ねられています。こうした活動を堅実に担っておられる委員の方々の存在が、弁護士自治を支える確かな力であると感じました。広報担当として関わった会員増加推進ワーキンググループ

では、委員会活動をはじめとする当会の活発な取り組みと、それを支える会員や職員の力こそが当会の大きな強みであることを改めて認識しました。それとともに、当会の魅力をいかに分かりやすく伝え、広く周知していくかについては、今後もより一層、重要な課題であると位置づけ、対策を講じていくべきであると強く思っています。さらに、国際委員会の担当として国際的なカンファレンス等に参加する中でも、当会の活動が多くの関係者の力と支えの上に成り立ち、国際的なつながりの中へも広がっている様子を目にしました。日々の業務を支えてくださった職員の皆さん、委員会活動をはじめ、様々な場面で支えてくださった会員の方々の存在は常に心強く、何度も背中を押されました。副会長としての立場は終わりますが、今後は一会員として、様々な形で弁護士会に関わっていきたいと考えています。

クライマーズ・ハイ

副会長 大森 顕 (53期)



副会長という職務はやはり激務でした。この原稿を書いている2026年1月、就任以来蓄積された心身の疲労はかなりのもので、任期満了までの2か月余り、改めて気を引き締めていかなければならないと思っていますところでは。

副会長という重い任務は、私にはあたかもエベレスト登頂という過酷な挑戦にも思われ、漸く任期満了という頂上(サミット)が近くに見えてきたものの、その前にはまだいくつもの難所があり、無事にサミットを踏めるかどうかは予断を許さない状況と言えます。

激務とはいえ、やりがいがあるということは確かで、多忙を極める毎日の中で季節が過ぎゆき、不慣れだったものが多少習熟してきたこともあって、小さな達成感を積み重ねた結果、現在、クライマーズ・ハイ(登山者の興奮状態が極限まで達し、恐怖感が麻痺してしまう状態)になっています。不用意に振り返ると反省点ばかりが思い出されそ

うで、不安や焦りに囚われて明日からの会務が滞ることがないように「前だけを見て一歩ずつ進む」こととしたいと思います。

もう1つ確かなのは、多くの方々に支えられてここまで来られたということです。心からの感謝を申し上げて、残りの任期を全うしたいと思います。

任期を終えてやりたいこと

ベストセラー作家横山秀夫さんの「クライマーズ・ハイ」(文藝春秋社)には、あるエベレストのサミッター(登頂成功者)は、頂上を踏んだ後、記念写真も撮らず、旗も立てずに、頭上を飛ぶ鳥に思いをはせていたというエピソードが書かれています。

任期が無事終わったら、私も、何にも囚われない鳥のようにになりたい。それが叶わないならせめて眠りたいだけ眠ってよいと言われた上で、鳥になった夢を見たい。

多くの人の真摯な活動

副会長 西川 一八 (54期)



これまで約25年間いわゆる町弁をしており、弁護士会の運営がどのように行われているかについてはきちんとした認識がありませんでした。とにかく目の前の課題にひたすら取り組んできた1年でしたが、そこで感じたことは、弁護士会は多くの人の真摯な活動によって支えられ、運営されているということです。役員はもとより、各種委員会の正副委員長をはじめとする委員の方々、弁護士会の職員の方々の尽力には驚かされました。たとえば、研修の段取りの鮮やかさ、問題点が浮かんできたときの速やかな協力など、これは弁護士会の活動に限ったことではないと思いますが、人が真摯なものごと打ち込む姿は見る者に大きな影響を与えます。

この1年の活動は一生に一度のことで、任期を終えればまた普通の生活に戻ります。が、この経験をきちんと自分の中にとどめて、今後の活動をしたいと思っています。

理事者室の思い出

数年前までは自分には関係のない場所で、何やら怖い場所だと思っていました。が、実際には、たえず人が出入りをして、話しをして、何か(楽しいこともアクシデントも含め)が起こる、非常に活気のある場所でした。

任期を終えてやりたいこと

他の副会長の趣味に影響を受けて、映画鑑賞とカラオケの練習をしたいと思っています。思っていたより影響を受けやすいタイプようです。それと、北方謙三氏の「水滸伝」は読み終えましたので、続編の「楊令伝」と「岳飛伝」を読みたいです。